

弘前大学院地域社会研究科公開セミナー
「人口減少・気候変動時代に人を育てるとはどういうことか」

「空間」を「場所」に変えるまち育て

北原啓司(教育学部)

1

1. 「交流人口」の危なさ

増田総務大臣の時代 → 平成の大合併
限界集落という言葉の一人歩き
もう合併するしかない…特例債がちらつく

少子高齢化は必然

そこで中央から出された「交流人口」
観光活性化という大目標

全国で観光学部・観光学科が誕生
そこにインバウンド効果！

そこに割り込むコロナ禍

交流の可能性が減少していく

とは言え、「ワーケーション」とい造語

移住の新しい形態

それだけで、地域の持続可能性は大丈夫か

2

2. 本当に必要な「関係人口」とは

交流以上定住未満というGoogleの解釈
旅行はするけれど、そこに移住はしない！
そんな中間的な定義ではないはず

「関係する」を言い換えれば

- そこに自分を大事にしてくれる場所はあるか
 - 自分がなんとかしたいと思える場所があるか
- ⇒ 「私の場所」を持っているか

定住人口であっても、関係人口になっていない！？
苦労には関係しなくても、恩恵には関係したい人々
関係はできるだけ薄い方がお洒落なスタイル？

3

かつて、男は、こう語りました



「あっしには、関わり合いのないことござんす」

by 木枯らし紋次郎

4

あるいは、こんなすかしたことを言っていました



by 柴田恭兵 in あぶない刑事

5

★でも24年前、この小学生は、こうつぶやきました



青森市つくだウエザーパーク

6

♠:ねえ、どうして、校庭じゃないのに掃除しているの？

♥:だって、ここ私たちの「場所」だもん！

7



8

事例：自分が関係する場所をもった人々
〈青森市佃气象台跡地公園計画〉

まちを「たべる」プロとして、公園づくりに参加

- 青森市立佃小学校の児童、PTA
- 町内会の皆さん
- 商店街の店主の皆さん
- 身障者を支援する人たち
- 商工会議所青年部の有志
- 専門家(建築士、弘前大学)

9



物語はここからはじまった(24年前の2月1日)

10



みんなで路上インタビュー

11



子どもたちは模型づくりのプロ

12



おじいちゃんたちもがんばってハサミと格闘

13



なんてカラフルな楽しい模型！

15



からだの不自由な人の立場から公園を考える

16



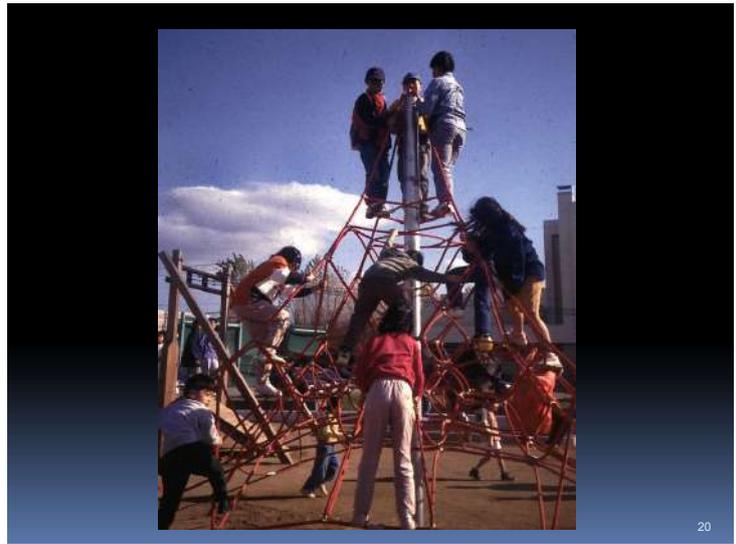
「つくる」人と「たべる」人とのケンカが始まった！

17



1年後、本当に公園ができた！！

18



20



北原さん、今日が私たちのスタートだよね！

21

★そして、それから二年たちました



青森に誕生したペタンクの殿堂

22



この小学生たちも、立派な関係人口

23

★関係を持たない人々の大きな武器

それが、クラウド・ファンディング

Crowd : 群衆

Funding : 資金調達

汗は流せないけれど、後ろから支える人々

まち育てにはいろいろな人が存在する

○ぶれずに、前に歩いて行く人

○時々質問をしてみんなに考えさせる人

○思い切って動く人々をカバーする人

○困ったときにいつでも動く用意をする人

○うまくいっているときに心配する人

○参加できないけれど、一緒に夢を見たい人

24

★マルカンデパート(花巻市)
—復活のために関係する人々—



クラウド・ファンディング
(私も気になっているんですよ！)



見学中のこの人たちは関係人口ではありません
いわゆる業界「関係者」！



3. 自分の想いをまちで表現する人々の登場
—自分がそもそも、まちと関係していなかった人々—

黒石のこみせ





実は自分の敷地は、歩道としてみんなと関係していた 32

★こみせに関心のない人々を関係させよう！

次代を担う人材を「育てる」ことを目的にした
黒石ならではのマネジメント戦略

↓
民間の活力と地域住民の熱い想いと組み合わせ
しかし、想いだけではまちづくりは進まない
現実の課題やビジネスとしての可能性を
真剣に学んでいく「まちづくり学習」

↓
日本メインストリートセンターの支援による
街なか通り再生プロジェクト(全国初)
※米国のメインストリート・プログラムがお手本
学習→組織化→担い手を育てる
優等生のリーダーを育てるのとは違う

★街なか通り再生プロジェクト

「横町十文字まちそだて会」の登場

＜私たちのまち育て戦略＞2012.6

街なかにも、自宅でも職場でもない
「第3の場」をつくる

その場でホッとくつろげる場

あずまいい場

文化と出会える場

→心のスイッチを切り替えられる

非日常の時間と空間

横町十文字エリアを「第3の場」として育てる

「歩いて回れるくつろげる街」

黒石まち歩きツアー そもそも自分たちが歩いていなかった





黒石市小さなまちかど博物館

★ところで、皆さんはこの長靴をご存じですか？



注文待ちの「ぼっこ靴」(26000円)

Kボッコ(靴のスミトモ)



★街に関心を持つと、「空間」が気になってきます



中町大通り 昭和7年。右側の老松は、いまでも健在

旧松の湯の再生(2015)



横町十文字まちそだて会が運営管理を受託



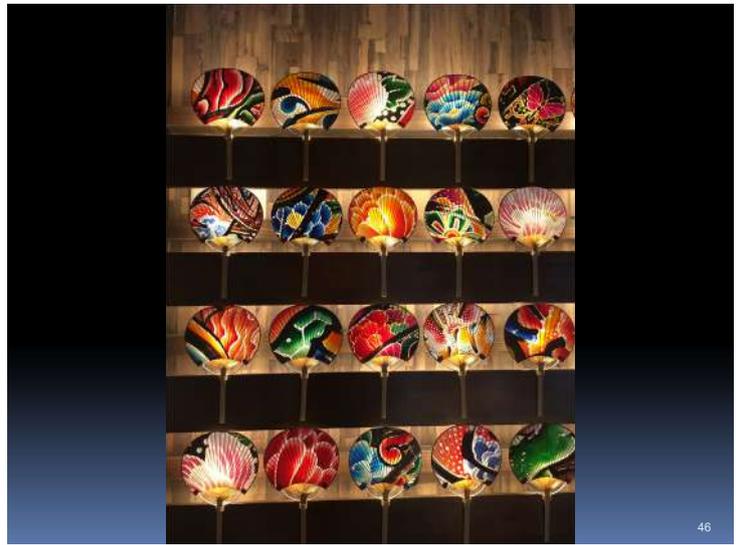
コロナに負けずに、新しい関係が生まれたまちなか



44



45



46



47

4. ずっと気にしてきた人々が、ついに関係を持つ

古くて新しい弘前の「場所」

—吉野町煉瓦倉庫の新しい命—

48

- 1907 福島酒造会社が工場・倉庫を建設
- 1956 朝日シードル株式会社・・・りんご
→ ニッカシードル (1960～)
- 1978 工場は移転し、政府米の保管庫 (～1997)
- 1988 美術家・村上善男 (弘前大学) が吉野町煉瓦倉庫を「版画美術館」にすべきと提起
煉瓦館再生の会 (約20名)
- 1991 煉瓦館再生の会が「現代日本版画展」開催
- 1994 弘前市が吉野町煉瓦倉庫設置構想を検討
私は4月に東北大学建築学科から異動
- 1996 弘前大学北原研究室に研究委託
煉瓦倉庫の活用法を考える市民ワークショップを開催

49

レンガ倉庫のゲニウスロキが甦った日
—奈良美智展弘前から弘前れんが倉庫美術館へ—
弘前大学 北原啓司

■そこにレンガ倉庫はあった
弘前市の中心市街地に立地する吉井酒造煉瓦倉庫は、大正時代に建設された、戦後は日本で最初の林檎酒 (シードル) を醸造していた場所でもある。弘前市民にとっては、だれもがその存在を知っている場所であり、内部はどんなふうになっているんだろうと、世代にかかわらず、好奇心を持って眺め続けた場所であった。

50

弘前市は1996年に文化施設としての可能性を検討する中で、私の研究室に委託研究を出していただき、小学生から高齢者まで参加し弘前としては画期的な市民ワークショップを開催し、報告書をまとめる。

その中心コンセプトは、創造的な空間を、このストックを活かしながら生み出していくというものであった。今もそのワークショップで小学5年生がつぶやいた感想を思い出す。

「ここはものをつくる場所だ！」

かつてこの倉庫でシードルの開発が行われていたことなど知るよしもなかった。休日の午後いっぱい時間を過ごした子どもたちには、そこは、クリエイティブな空間であった。

51

○2002～2006 奈良美智展弘前

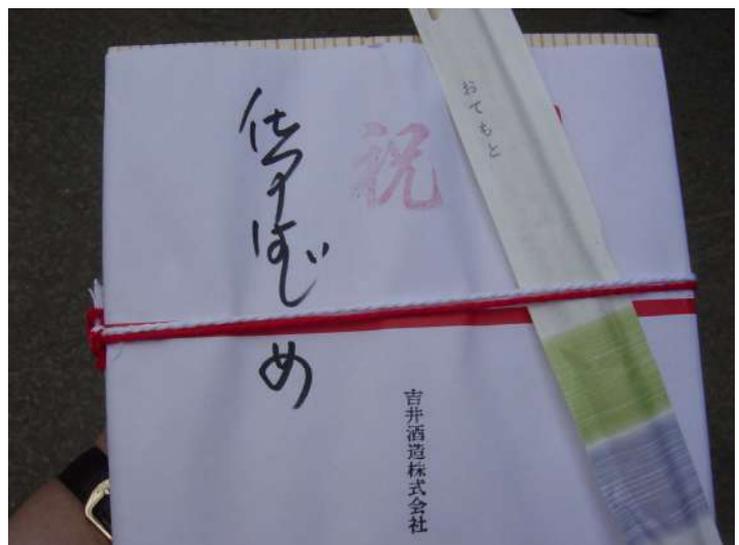


52

●70歳から高校生まで、集まったボランティア500名



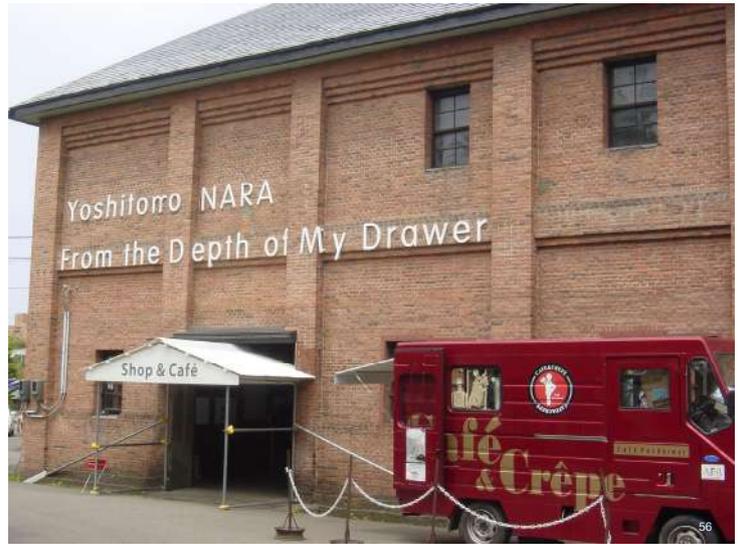
53



倉庫が美術館に変身した...



55



56

**YOSHITOMO NARA
+ graf**

AtoZ

July 29 - October 22, 2006

Hirosaki

www.harappa-h.org/AtoZ/

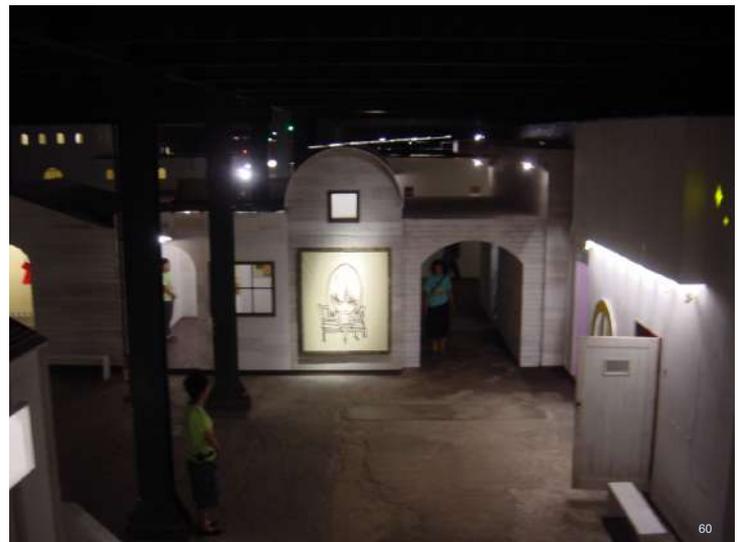
57



58



59



60



4年間で関係人口は激増



★街が動き始める！？





和菓子屋さんも関係人口



- 2002～2006 奈良美智展弘前
- 2015 弘前市が土地と建物を取得
吉野町煉瓦倉庫・緑地整備検討委員会
- 2017 (仮称) 弘前市芸術文化施設スタート
- 2019 吉井千代子さん逝去
- 2020 弘前れんが倉庫美術館完成

73

「ここはものをつくる場所だ」というつぶやきのような形で、レンガ倉庫という空間に表現していくのか
使われない「空間」として存在するだけだったレンガ倉庫を、市民の大切な「場所」であり、「何かをつくる場所」に再生することの意味こそが、古くて新しい街「弘前」の真骨頂「場所」の復権
空間としてではなく「場所」として存在することができるかどうか。コンバージョンの成否は、まさにその一点にかかっている。単なる空間が「場所」に変わるとき、その空間が、かつて「場所」であったときに存在していた物語や想いが、自由に新たな形態で甦ることが必要になってくる。

74

20年間の中で、その後半部分に大きなインパクトを与えた奈良美智展弘前は、明らかにこの開館につながっており、それをずっと楽しんできた弘前市民こそが、この新たな芸術文化施設の誕生を喜ぶ権利がある。

そしてそれは、この「場所」への人々の想いを、見事な発想で形に表現してくれた建築家田根剛さんの傑出した力量によって、見事に、市民の意識の外になりかけていたもったいない「空間」は、新たな光が外に向かって飛び出していく「場所」として甦ったのであった。

田根さんのコンセプト
『 記憶の継承 』

75

建築家田根剛が語る弘前れんが倉庫美術館
(<https://www.pen-online.jp/article/001167.html>)

「記憶をどう継承するか。それは人類の壮大なテーマであり、僕自身が探求するテーマです。建築には場所を未来へつなぐ力がある。建設とともに多くの人に関わり、それを起点に人々の人生が交差します。そこから新たな記憶が始まり、未来に繋がっていく。今回、改築にあたってわかりやすく新旧を対比させる計画では未来を見いだせないと感じました。現在の日本ではレンガ組積造の建物を新たに建設することができない。だからこそ、修繕して建物の精神を『延築』することによって記憶を継承したいと思ったんです。

76

改修前のレンガ倉庫
美術館という公的空間 → 高い耐震性能
新たな構造体で壁を支えレンガを仕上げ材とみなすことで問題の解決を図るのが一般的
「それでは煉瓦構造ではなく
仕上げ材になってしまう」

既存の煉瓦壁に空けた深さ9mの穴に12mの鋼棒を打ち込みコンクリートを流す耐震補強

「僕たちはもう一度煉瓦をつくって積み上げ、思いを継承していく必要がありました。先人の記憶を未来に届けたいと思ったのです。新たな美術館として運営していくために、過去の技術の継承、最新の技術への挑戦の両面が必要だったんです」

77



煉瓦積み職人とともに挑んだ「弘前煉瓦積み工法」



「手仕事でつくられた当時の空間は情報量が多く、馴染ませるために細部まで仕上げに気を使っています。古い建物は解体して初めて問題が露呈する箇所も多く、現場に通い続ける必要がありました。けれど長く続いた建築への絶対的な敬意を持ち、手を抜かずに神経を尖らせて自分たちがつくるべきものをつくるのが重要でした。気を抜くと違和感が出てしまう。もちろん館内すべてに手を入れてますが、どこを修繕したのかわからないようにしたかったんです」

80

「奈良さんの展覧会が美術館を設立する原点となりました。多くの市民がアートに触れた記憶を持っていたことは大きいでしょう。開館記念展もまた、記憶に焦点をあてた展示を構成しています。コレクションがないところからスタートする弘前れんが倉庫美術館は、さらにコンセプトを深め、アイデアを集めていくことが求められます。未来を見るために、古く遠い文化の記憶を探り、起源を探る。記憶とは人々の集合が生むものです。そして、それが人の未来を掻き立てていく。展覧会の記憶が、弘前の新しい未来を生み出していきます」

81

いよいよオープン(2020. 7)



かつてのシードル研究所が学芸員ルーム

